

幼児の気質の違いと保育の在り方について

太 田 雅 子
細 田 章 子

1. はじめに

近年、石川県内の保育士研修会において取り上げられる『気になる子』としての子どもの問題行動の多くは、攻撃的で自己制御力に欠けるというものである。また、自己制御力の発達を促すために、どのような保育者の援助が必要であるのかを考える研修や実践研究を開始している保育所も数多くある。

こうした子どもの問題行動の発生要因について、子ども自身の乳幼児期からの行動特徴、家庭の社会経済的状況、親の養育態度など多要因の時系列的な相互作用によることが報告されている（菅原、北村、戸田、島、佐藤、向井、1999）。特に菅原らの研究では子どもの問題行動と気質的特徴との関係が明らかにされている。生後11年目の注意欠陥および攻撃的・反抗的な行動傾向（Externalizing な問題行動）と生後18ヶ月時に TTS（Toddler Temperament Scale）によって測定された気質的特徴の3つの特性で有意が認められている。問題行動の出現率が高い方が「注意の集中性」と「体内リズムの規則性」が低く、「反応的強度（喜怒哀楽の表出強度）」がより強い傾向にあることを示している。

発達初期から見られる子ども自身の行動特徴が重要な予測要因であることに関して、Capsi、Henry、McGree、Mofit & Silva(1995)は、3歳児と5歳児の気質特徴のうちコントロールの欠除（情緒不安、落ち着きのなさ、反抗的）と児童期後期・思春期における問題行動とに正の相関を見出している。

トマスとチェスのグループによる気質の研究（1963）では、子どもの人格的発達に対して、母子相互作用における子どもの気質の役割に注目する必要性があることを示唆している。これまで養育者との相互作用に影響を与えるのは親や保育者の行動（一方的な影響）であると考えられていた。しかし子ども側の個体的特徴とそれが養育者に及ぼす影響を見逃すことはできない。これらは双方向的なもので、子どもの気質の特徴によって養育者の行動が影響を受け、その結果子どもは自分が養育者からどのような働きかけを受けるかを規定することになると説明している。さらに気質的特徴から子どもを、「楽な子」「むずかしい子」「出だしの遅い子」の3つのタイプに分類している。「楽な」気質の子どもは、生物的功能が規則的で新しい刺激に対して積極的に反応（接近）し、順応が早く、機嫌がよいという特徴を示す。「むずかしい」気質の子どもは、生物的功能が不規則で新しい刺激に対して回避的な反応を示し、順応が遅く、不機嫌な様子が多くみられる。「むずかしい」

気質の子どもは「楽な」気質の子どもと比較して養育者の注意を多く求めるために、養育者からも注意を払われる度合は高いが、養育者にとって大きな負担として感じられる可能性があるため、虐待にもつながりうると述べている。

親（保育者）と子どもの間の「適合のよさ」「適合のわるさ」も後の人格の発達に影響を及ぼすことは予想される。「適合がよい」とは、親や保育者の期待や要請が子どもの気質や能力などの特徴とマッチしている状態である。例えばトイレトレーニングにおいて、排便のリズムが規則的で活動性がそれほど高くない子どもは、母親にとって排便のしつけをすることはそれほど難しくはなくスムーズにマスターできることから、子どもも親も満足感を得られるであろう。「適合がわるい」とは、親や保育者からの期待や要請が過度なものと子どもが感じる場合で、子どもの気質や能力などの特徴とマッチしていない状態である。子どもは強いストレスのもとに置かれて、健全な発達が妨げられる可能性がある。トイレトレーニングにおいても、活動性がとても高く反応も強い、生理的リズムにあまり規則性がない子どもはじっと便器に座ることは難しく暴れるたり泣き叫ぶこともある。その時、養育者が押さえつけたり叱ったりしても逆に排便を拒否するだけでマスターするのに手間取ってしまうであろう。特に母親が神経質で几帳面な場合には強制的にしつけを始めることもあり、子どもの気質的特徴と合わないためにうまく行かず親子共々自信をなくす結果になってしまう。

このように気質的特徴の違いが養育者との相互作用、ひいては人格形成に何らかの影響を及ぼすことが考えられるが、保育現場においては、今まで子どもの気質の違いに着目して子どもに対応することがあまりなかったように思える。

そこで、本研究においては、子どもの問題行動と気質的特徴の関連性の見地から、気質的特徴を質問紙方法によって測定することを目的とする。さらに自己制御力に欠ける『気になる子』として養育者（親・保育者）が捉えている子どもは、自己制御力と関連する気質的特徴は他の子どもたちと比較して違いがあるのかどうかを調査する。

2. 方法

1) 質問紙の作成

アイゼンバーグら（Eisenberg, Fabes, Jones, Smith, Guthrie, Poulin, Shepard & Feidman 1999）は Preschool（保育所・幼稚園）における幼児（平均4.2歳）の気質的特徴の違いと子ども同士の相互交渉との間に有意な関係があることを見出している。自己制御力の高さが、友だちとの建設的な関係作りに結びつくことを示しているが、この自己制御力はネガティブな情動の表出（奮起）及び気質的特徴と関連している。アイゼンバーグは気質的特徴の測定をロスバート（Rothbart）の児童行動質問紙；Children's Behavior Questionnaire (CBQ) 用いて測定しているが、CBQを構成している15項目のうち、注意の集中性に支持される自己制御力を測定する Effortful Control の区分に属する以下の4項目を用いている；Attentional Focusing (AC)、Inhibitory Control (IC)、Low Intensity Pleasure (LP)、Perceptual Sensitivity (PS)。

本研究においても CBQ のサブカテゴリーである Effortful Control の 4 項目を用いることにした。各項目は次のような子どもの気質的特徴を測定するものである。AC：子どもが課題に集中するよう注意を向けて、それを持続することができる傾向（以下、集中力）。IC：指示されたことに対して、もしくは初めてで馴染みの薄い物事に対しても取り組もうとしたり、望ましくない行動を制止された時に抑えることができる傾向（以下、自己統制力）。LP：変化や動き低い刺激に対して満足し楽しむことのできる傾向（以下、穏やかさ）。PS：外界からの僅かで低い刺激を敏感に感知する傾向（以下、感受性）。

ロスバート（1998）は「気質」を個体の生物学的に規定された永続的で体質的なものの反映と捉えている。すなわち周囲の環境に対する生物学的な敏感性が子どもそれぞれの反応の仕方に特徴的に現れ、さらに環境に対する接近・回避によってこうした反応の仕方を調整するような自己制御行動の違いが生れると考えている。集中したり注視する仕方の違いが刺激に対する反応や自己制御と関連すると述べ、初期の注視の仕方の違いが目新しく馴染みがないものを警戒して回避するのがあるいは接近しようとするのかという行動の制御と結びつくと説明している。

CBQ の使用にあたっては、筆者（太田）がロスバート博士から許可を得て日本語に翻訳する作業を行った。また翻訳の際には、保育現場（保育所・幼稚園）という設定に見合う言葉を選択するようにした。翻訳の妥当性を検討するために、第 3 者（英語に精通する他大学の教員）によるチェックを実施し、47 の質問を設定した（表 1）。CBQ のサブカテゴリーである Effortful Control の 4 項目；AC（集中力）、IC（自己統制力）、LP（穏やかさ）、PS（感受性）からの質問をランダムに配置した。それぞれの質問数は、9、13、13、12 であり、逆転項目（R）を設けてある。1（その行動について該当しない）～7（該当する）の 7 件法で評定してもらった。評定者は保育士と子どもの保護者（以下、親）の二者となるため、質問文中の言葉の使用に際して、保育士用の質問紙には「先生」、保護者用には「親」と訳した 2 種類の質問紙を用意した。

表 1.

1. 自分が選んだ遊び（おもちゃ）や活動は たいいて最後まで続ける。	AF	6. 言葉の指示に従ってするゲーム（『落ち た落ちた何が落ちた』など）は得意である。	IC
2. （子どものしゃべっている声が大きいので） 「声を小さくして！」と言え、その ようにする。	IC	7. じっと座って日光浴などをすることが 好きである。	LP
3. 人の話をただ聞かされることは、あまり 好まない。	LP (R)	8. 先生の髪型など様相が変わっても、 それに対して気づかず何も言わない。	PS (R)
4. 物にさわって、表面がさらさらして いたり、ごつごつしていたりする違いに 気づく。	PS	9. ひとつの遊び（活動）をやり終えない うちに次の遊びへと移る（次から次へ と遊びを変える）。	AF (R)
5. 練習が必要な活動をする際、やる気を持続 させるのが困難である。	AF (R)	10. 先生の話や説明に従って行動すること がなかなかできない。	IC (R)

太田雅子・細田章子

11. 温かいお風呂などにつかることなどが好きである。 LP	29. 絵本の読み聞かせの時には、夢中になって、長い時間でもよく聞いている。 AF
12. 先生が新しい服を着てくると気がつく。 PS	30. 声に出して笑ったり、にこにこしてはいけない状況ではそうすることができる。(避難訓練など真剣になる必要がある時) IC
13. 絵を描いたり、ぬり絵をする時、とても集中して行っている。 AF	31. 人の話をただ聞くだけでも喜んでいる。 LP
14. 遠足や園外保育に行く時など、持っていく物を自分で考えて用意することができる。 IC	32. 風邪などで先生の声がおかしかったり、風変わりな声の人物に出会うと、それについて何かを言う。 PS
15. 絵本を読んでもらうことは、あまり好まない。 LP (R)	33. 他で何かもの音がする時には、気が散って遊びや活動に集中できない。 AF(R)
16. 小さな音でも聴こうとする。 PS	34. 先生の説明や指示を聞いて行動することができる。 IC
17. (積み木やブロックなど) 作ったり、組み立てたりするような遊びが好きで、長い時間真剣にしている。 AF	35. 絵本を見ることが好きである。 LP
18. 新しいおもちゃが出された時、それですぐに遊びたくても、先生から待つように言われた場合には待つことができる IC	36. 先生の(顔の)表情の違いには、あまり気づかないようである。 PS (R)
19. 先生の横によくピッタリとはりついたりする。 LP	37. 危険だから気をつけるようにと言われた場所の周りでは、注意深く行動する。 IC
20. 先生の髪型などの様相が変わるとそれについて何かを言う。 PS	38. 人が歌うのを聴くことが好きである。 LP
21. 自分が一旦始めた遊びや活動を中断するのは難しい。 AF	39. 食べ物の固さや歯ざわりの違いなどについては何も言わない(反応を示さない)。 PS (R)
22. 列に並んで待つということができない。 IC (R)	40. 道路を横断する時、注意を払おうとはしない。 IC (R)
23. 座ってするような静的ゲームはあまり好まない。 LP (R)	41. わらべ歌のような、言葉の調子がよいものが好きである。 LP
24. 鼻の大きさなど、人の顔の様相について話をすることはあまりない。 PS (R)	42. 物に汚れやほこりなどがついてると、小さなものでも気がつく。 PS
25. お話(物語)を聞いている時、すぐに気が散る。 AF(R)	43. 「してはダメ」と言われたら、やめる。 IC
26. (誕生会など) 園全体での活動の場で、静かに座っていることが難しい。 IC (R)	44. 静かな動きのリズムを好む。例えば、やさしく揺らすことなど。 LP
27. リズミカルな音楽や動きが少ない教育番組には、あまり興味を示さない。 LP (R)	45. 香水、たばこ、料理などののにおいについて、あまり気づかないようである。 PS (R)
28. 保育室に新しい物があるとすぐに気がつく。 PS	46. してはいけないことと知っている場合、やりたい誘惑にかられても、やめることができる。 IC
	47. 先生の膝の上に座ることが好きである。 LP

2) 対象と手順

2001年7月に石川県X町の公立保育所3園の4才児クラスに調査を依頼し、ひとりの子どもについて担当保育者と親との二者から質問紙に回答してもらった。担当保育者からは「クラスの中の気になる子どもについてよく知りたい」という主旨で筆者（細田）が相談を受けたため、本研究の目的を提示して許可を得た。親については、担当保育者から家庭での子どもの様子を知るための調査として依頼した。同年10月までに質問紙を回収し（55名分、回収率97.3%）、これについて統計的分析を行った。

3. 結果と考察

1) データの分析

各項目において質問数が異なるため（AF(集中力)…9、IC(自己統制力)…13、LP(穏やかさ)…13、PS(感受性)…12)、各項目ごとの満点を100とした場合に換算して得点を表示した（表2）。これら4つの項目の評価を総合した平均点は、親（平均66.1 SD7.8）の方が保育者（平均60.6 SD8.7）よりも高く、統計的に有意な差であった（ $p=0.0021^{**}$ ）。項目別に保育者と親の評定を比較した結果においても、AF(集中力)、IC(自己統制力)、LP(穏やかさ)、PS(感受性)のすべてにおいて親の評定は保育者の評定よりも有意に高かった（それぞれ、 $p=0.0090^{**}$ 、 0.0235^{*} 、 0.0001^{**} 、 0.0034^{**} ）。よって、ある子どもについて親が比較的「自己制御力」が高いととらえている場合でも、保育者からはその子どもの「自己制御力」は低いと見なされていることが一般的であることがわかった。

表2. 項目別および総合の平均点

項目		保育者	親
AF(集中力)	平均 (SD)	55.8 (11.8)	61.1 (10.4)
	分布	21 ~ 78	21 ~ 84
IC(自己統制力)	平均 (SD)	63.1 (12.7)	67.2 (11.8)
	分布	20 ~ 95	21 ~ 93
LP(穏やかさ)	平均 (SD)	53.8 (9.5)	60.9 (7.4)
	分布	30 ~ 80	41 ~ 80
PS(感受性)	平均 (SD)	68.7 (10.3)	74.5 (9.4)
	分布	25 ~ 88	35 ~ 90
総合評価	平均 (SD)	60.6 (8.7)	66.1 (7.8)
	分布	32 ~ 82	36 ~ 82

つづいて、保育者と親からみて「自己制御力がふつう以上である」子どもと、「自己制御力が低い」子どもがどれくらいいるのかを明らかにするために、親の総合点をX座標、保育者の総合点をY座標として、すべての子どもを平面上にプロットした。そして、平均値から標準偏差を引いた数値（担当保育者=51.9 親=58.3）より評価が高い場合を「自己制御力がふつう以上である」、これより低い場合を「自己制御力が低い」とみなすことにした。これによって、子どもをつぎの4つのプロフィールに分けることができる。

I 保育者から見ても親から見ても「自己制御力」が低い

- Ⅱ 親から見た「自己制御力」はふつう以上であるが、保育者から見た場合は低い
- Ⅲ 保育者から見ても親から見ても「自己制御力」がふつう以上
- Ⅳ 保育者から見た「自己制御力」はふつう以上であるが、親から見た場合は低い

図1 子どものプロフィール

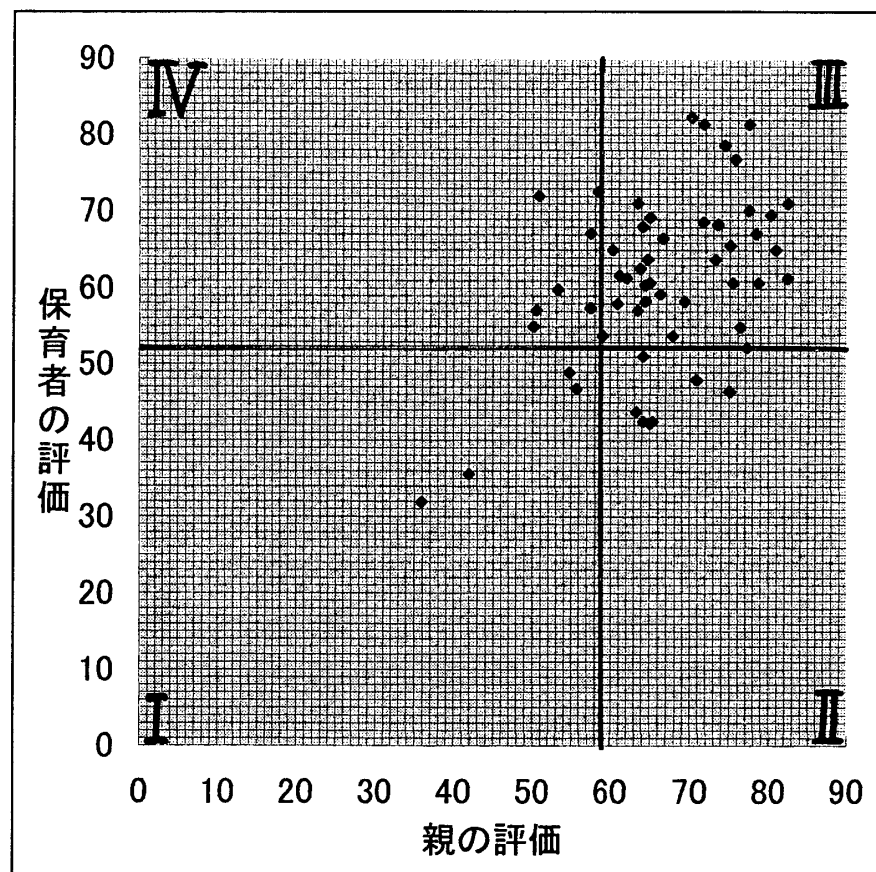


表3. 保育者と親の評価を合わせた子どものプロフィール

子どものプロフィール	人数 (男/女)	保育者総合 平均 (SD)	親総合 平均 (SD)
I 保育者、親ともに低い評価である	4 (4/0)	41.1 (7.0)	47.3 (8.3)
Ⅱ 保育者の評価は低く、親はふつう以上	8 (7/1)	46.6 (3.6)	67.9 (4.9)
Ⅲ 保育者、親ともにふつう以上の評価	36 (11/25)	65.4 (6.1)	70.2 (6.2)
Ⅳ 保育者はふつう以上、親の評価は低い	7 (2/5)	63.0 (6.6)	53.7 (3.1)

この調査を依頼する段階で筆者が「気になる子」「手がかかる子」として保育者から相談を受けていたのはH男、N男、U男の3名であった。このうちU男の親からの質問紙は未回収であったため集計から排除されたが、残る2名であるH男（親の評価＝42点 55人中54位 保育者＝36点55人中54位）、N男（親＝56点55人中49位、保育者＝47点55人中49位）はともに「Ⅰ 保育者から見ても親から見ても「自己制御力」が低い」に含まれている。このことから、保育者が問題児として捉

えている子どもについては保育者、親ともに「自己制御力が低い」と捉えられていることがわかった。

つぎに、保育者の評価と親の評価の違いをみるために、図1と表3をもとにまとめなおした(表4)。保育者、親ともに「自己制御力がふつう以上である」ととらえているのは男児よりも女児が多く、「自己制御力が低い」と捉えられているのは男児が多い。とくに、保育者の評価が低い子どもでは男児がほとんどを占めている。ここからは、保育者から見た場合の自己制御力が低い子どもには男児が多いということがわかる。

表4. 保育者の評価と親の評価

子どものプロフィール	人数 (男/女)	保育者総合 平均 (SD)	親総合 平均 (SD)
保育者の評価が低い (ⅠおよびⅡ)	12 (11/1)	44.8 (4.8)	61.0 (9.2)
親の評価がふつう以上 (ⅡおよびⅢ)	44(18/26)	62.0 (8.0)	69.8(6.0)
保育者の評価がふつう以上 (ⅢおよびⅣ)	43(13/30)	65.0(6.2)	67.5(7.5)
親の評価が低い (ⅣおよびⅠ)	11 (6/5)	55.0 (10.2)	51.4 (5.1)

4 考察と今後の課題

まず、ある子どもについて親が「自己制御力」が高いと捉えられている場合でも担当保育者からはその子どもの「自己制御力」は低いと見なされることが一般的であるという結果からは、親の見方が甘く保育者の見方が厳しいということがわかった。これには、とくに少子化の進む現代において、家庭ではそもそも子どもが「自己制御力」を働かせなければならないような場面状況が少なく、また親にとっても我が子との比較対象が得られにくいため子どもの気質をよい方向に解釈しがちであるということが考えられるのではないだろうか。これを明らかにするためには、保育所と家庭との双方において子どもと大人との実際のやりとりを観察し、自己制御力を働かせられるような場面がどの程度あるのか(保育所、家庭それぞれの場の特性)を明らかにする必要がある。あるいは、質問紙を行う際に子どもの属性として同胞数を確認し、例えば1人っ子の場合と兄弟姉妹のいる子どもの場合とにおいて、親の評価に違いはあるのかを明らかにしてもよいだろう。

つぎに、本研究のなかでは、「保育者が気になる子」について、親、保育者ともに「自己制御力が低い」ととらえていることがわかった。この結果は、質問紙の有用性を示すものと思われるが、さらに被験児数を増やし確認する必要があるだろう。また、実際の保育場面において男児と女児の行動特性にどのような違いがあるのか、自然場面での観察を行う必要があるだろう。

5. 引用文献

Capsi, A., Henry, B., McGee, R. O., Moffitt, T. E. & Silva, P. A. (1995). Temperamental origins of child and adolescent behavior problems: From age three to age fifteen. *Child Development*, 66, 55-58

太田雅子・細田章子

Eisenberg, N., Fabes, R. A., Jones, S., Smith, M., Guthrie, I., Poulin, R., Shepard, S., & Frieman, J. (1999) Regulation, Emotionality, and Preschool's Socially Competent Peer Interactions. *Child Development*, 70-2, 432-442.

Rothbart, M. K., & Bates, J. E. (1998). Temperament, In N. Eisenberg (Ed.), W. Damon (Series Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development* (pp. 105-176). New York: Wiley.

Rothbart, M. K. "Children's Behavior Questionnaire",
本人の許可を得てインターネットよりダウンロード.

菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・鳥悟・佐藤達哉・向井隆代 (1999). 子どもの問題行動の発達 : Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から. *発達心理学研究*. 10-1, 32-45.

Thomas, A., Blich, H. G., Chess, S., Hertzling, M. E., & Korn, S.
Behavioral individuality in early childhood. 1963. 三宅和夫『子どもの個性—生後2年間を中心に』
東京大学出版会. 2000.